

## 一色道猷の九州における動向

一色道猷は南北朝時代に室町幕府の九州統治機関である九州探題として活躍した武将です。

道猷が九州入りをしたのは、1336年、足利尊氏に従ったことでした。同年2月、京都回復に失敗した尊氏は九州まで下ってきました。多々良浜の戦いで少弐氏とともに菊池氏を破ると、尊氏はその勢いをもって、1カ月後には再び東上し、京都回復に成功します。このとき、尊氏は道猷を九州にとどめ、九州内の尊氏方の軍勢を統括させました。これが九州探題の始まりです。

道猷の九州経営は大変困難なものでした。道猷が1343年に記した室町幕府への報告書によると、経済的・軍事的に基盤が弱く、帰京したい旨を9度も幕府に奏上したといえます。

足利直冬が九州入りし、九州が三つ巴の戦闘状態となる1349年以降は、さらにその困難さが増します。直冬は尊氏の実子、尊氏の弟直義の養子です。尊氏と直義が対立すると（観応擾乱）、直冬は直義方として活動しますが、九州武士の積極的な歓迎を受け、わずかな期間に大宰府入りを果たします。直冬という第3極の出現に

## 太宰府人物志

資料室だより②

より、大宰府を本拠とする少弐氏が幕府方から離れ、直冬方についたのです。さらに、尊氏と直義の間に和平が結ばれると（正平一統）、1351年、今度は直冬が九州探題職に任じられたのです。

しかし、直冬の隆盛も長くは続きませんでした。道猷は南朝方と協力して直冬を攻め、ついに九州外へと追いや、ることに成功します。さらに、1352年の11月、翌年にか少弐氏を大宰府に責め、優位に戦闘を進めます。

ところが、ここで、これまで少弐氏と敵対することの多かった菊池氏が少弐氏に味方し、1353年2月の針摺原の戦いで道猷は大敗を喫してしまいます。この合戦後敗続した道猷は、20年にわたる九州経営を放棄し、ついに1355年に九州を離れ、のちに上京しました。

これにより九州における幕府方の勢力は非常に弱体化します。その勢力が回復するには、1370年に九州探題となった、今川了俊の活躍を待たなければなりません。